

〈書評〉

## 森岡正博著 『生命学への招待 バイオエシックスを超えて』

安田喜憲

「生命学への招待」という主題をみて、自然科学の本ではないかと錯覚した。しかし、副題「バイオエシックスを超えて」にあるように、この本は倫理学の本である。生命への問いかけから、現代文明と現代科学のあり方を問い直し、人類と自然の共存への道標をみつけたそうとする野心的な試みの書である。和辻哲郎以来の倫理学に、分子生物学、医学、生態学などの自然科学の領域がとりこまれ、新しい分野が開拓される可能性が示された。

序章「生命学は何でないか」では、生命学のアプローチと、著者の意図する生命圏倫理学の構想が述べられる。生命学は四つの研究方法をもつ、①生命科学アプロ

ーチ、②哲学・社会学アプローチ、③生命倫理アプローチ、④環境教育論などの応用的アプローチである。著者はその内、③生命倫理アプローチから、生命学への挑戦を試みる。

著者は指摘する。今こそ人間と人間以外の生命圏の倫理学の構築が必要である。生命圏倫理学は、倫理学に地球環境の概念を導入した従来の環境倫理学とは根本的に相違している。それは人間非中心主義をとる点においてである。環境倫理学はいまだ人間中心主義の概念を脱していない。人間以外の生命圏に、人間と同じ価値を見いだした時、はじめて生命圏倫理学への道が開かれる。

したがって、その生命圏倫理学の基本的立場は、自然を手つかずの状態、あるがままに保存するという、エコロジー運動にもつながる。

ただ現実には、人間非中心主義に立脚する生命圏倫理学の研究者の中にも、自然の協力者として自然の価値を認めつつ、自然を改造する立場をとる人がいるという。自然を手つかずの状態であるがままに保存するのか、それともある程度人間の手を加えて保全するかは、現代の自然保護の重大な課題であるが、それはまた生命圏倫理学にとっても重要な課題になりつつある。

第二章「生命圏の原理と他者の原理」では、生命圏の概念規定が論じられるとともに

に、著者の自然と人間のかかわりのあり方についての基本理念が示される。

著者はまずこう指摘する。「生命圏内では全ての生命は平等であり、人間がローストビーフを食べるように、人間も動物や微生物に食べられるべきである」と主張する。人間の死体が微生物によって分解され、土に帰るように、人間が動物や微生物に食べられることは、自然の食物連鎖の中では、当然のことである。問題は食物連鎖の中断が人間によって引き起され、人間のみが極端に肥大化し人間が動物に食べられる恐怖を忘れてしまったことである。人間が動物や微生物に食べられる危険がなお残存している社会の方が、より健全であることは言うまでもない。世界は人間のためにのみあるのではないのである。ヨーロッパのように人間が自然に襲われるという恐怖を失ってしまったところでは、人間が果たして活動的で豊かな生命力をこれから長期にわたって維持できるかどうかさえ疑問である。さらに著者は続ける「核戦争は生命圏の生き残る確率を確実に低下させる。しかし、

知床の森林伐採は、地球レベルの生命圏の生き残りには、直接つながらないであろう」と。しかし、自然破壊は規模だけが問題なのではない。

例えば樹齢六〇〇〇年の屋久杉を一本切った所で、地球レベルの生命圏にはそれほど、いや全く影響を及ぼさないであろう。しかし、樹齢六〇〇〇年の屋久杉を何のためらいもなく切り倒せるその行為が、人類とこの地球上の命あるものを破壊させる自然破壊や核戦争を是認する行為に直結するのである。知床の森の一部をなんのためらいもなく破壊する行為が、実は核戦争を引き起し、地球規模の生命圏の破壊に直結していくことに、目を向ける必要があるのではなからうか。

ただその中で、今西錦司氏の「すみわけ説」は生命圏の側に主体性をみとめた、人間非中心主義につながるものであるという見解は正しい。評者自身も今西説の中に、人間非中心主義の生命観に立脚した、東洋の科学を樹立する視点が、多く内包されていると思う。今後は、この今西説の掘りさ

げを、著者には希望したい。

ヨーロッパの哲学が人間中心主義となえながら、その具体的内容を提示できなかった。このヨーロッパの人間中心主義を克服することの重要性は、すでに梅原猛氏<sup>3)</sup>によって、くりかえし指摘されてきたことでもある。著者が指摘するように、人間中心主義克服の最後の目標は、地球環境と人類の未来を救済することにある。その現代的意味はますます重要性をおびつつある。

この他第三章「拡大身体としての生命圏」では、私達が身体の健康に留意するうちに、生命圏の健康にも配慮が必要である。身体への医療処置と同じく、生命圏への処置が必要である。育てられるものの主体性を最大限に認める農業のやり方が指摘される。これに類した運動はすでに有機農法など様々な局面において近年試みられている。第四章「生命学と科学倫理学」で著者は、生命圏倫理学が現代の自然科学の「舵とり」の役割をする必要があると指摘する。評者がかつとも高く評価する部分は、第六章「生命圏倫理学の日本の変容」である。

そこには生命観の相違を軸として、比較文化論、比較文明論を展開しうる可能性が指摘されている。日本人、中国人、アメリカ人の生命観の相違から、日本とアメリカそして中国の比較文化論を展開する視点はあざやかである。人間の文化や文明の問題を、生命への問をつきつめることから出発する試みを始めて行ったのは梅原猛<sup>(3)</sup>氏である。

梅原氏の日本文化論の出発点は「自然生命的存在論」の発見にある。本書ではこの梅原氏の業績についてはふれていないが、今西学とともに、梅原日本学こそ、生命圏倫理学の構想の出発点をなすものではないだろうか。

生命観は個々の文化風土と不可分の関係にある。日本人がアメリカのバイオエシックスの導入にあたって、道理を知識としてではなく、情の心においてとらえる道理の風土化がみられると著者は指摘する。アメリカでは人工妊娠中絶には、危険条件が先行する。これに対し、日本では心情がこれに入り、情や慈悲が道理となる。梅原氏<sup>(4)</sup>が東洋の文明を「慈悲の文明」として位置づ

けた見解を、生命圏倫理学から指摘した点は高く評価できよう。

さらに欲をいうなら、生命観にはその背景となる自然風土、とりわけ自然観が密接不可分のかかわりをもっている。生命観と自然観のかかわりを、今後の課題として、より深めていってもらいたいものである。

終章「生かすことと生かされること」で本書はしめくくられている。自然によって生かされていることを常に自覚し、感謝しつつ生きつづける。自然を生かすことが生命学の基本である自覚と発見が、本書の結論である。

「自然を生かし、己をも生かす」ということの重大さは、池見酉次郎<sup>(5)</sup>氏の指摘をまっまでもなく、くりかえし指摘されてきたことである。生命学に東洋の生命観、自然観を導入し、新しい日本の科学としての生命圏倫理学の構築の必要性に気づいた著者が三十歳の若さであることを考えれば、東洋の生命学に立脚した比較文化論、比較文明論の前途は洋々たるものがある。評者もかつて、森と人間のかかわりあいの中で、さ

さやかな試みを行った<sup>(6)</sup>が、東洋の自然観、梅原氏のいう「自然生命的存在論」に立脚した具体的な比較文明論の展開が期待される。東洋の生命観に立脚した生命圏倫理学を、具体的な研究事例のつきかさねの上に、確立する。それこそが、著者の真価が問われる所である。今後の成果が大いに期待される。(一九八八年刊 勁草書房)

注

- (1) 安田喜憲『文明は緑を食べる』読売新聞社 一九八九年
- (2) 今西錦司 復刻版『生物社会の論理』思索社 一九八八年
- (3) 梅原猛『美と宗教の発見』筑摩書房 一九六七年 同『文明への問』集英社文庫 一九八六年
- (4) 梅原猛『日本文化論』講談社学術文庫 一九七六年、同『日本人の「あの世」観』中央公論社 一九八九年
- (5) 池見酉次郎『セルフ・コントロールの医学』NHKブックス 一九七八年
- (6) 安田喜憲『森林の荒廃と文明の盛衰』思索社 一九八八年